

# 旧稲葉地配水塔

現 名古屋市演劇練習館

中部地方の  
選奨土木遺産

所在地：愛知県名古屋市 竣工年：1937（昭和12）年  
管理者：名古屋市

認定理由：16本の支柱に囲われた独特のフォルムを持つ配水塔で、戦後には図書館、演劇練習館へと転身して有効活用される稀有な土木遺産である。

平成26年度登録



独特なフォルムを持つ旧稲葉地配水塔

1914（大正3）年に人口46万人を想定して給水を始めた名古屋市の上水道施設は、都市の急激な拡大とともに拡張を繰り返したが、1929（昭和4）年には150万人（前段階は100万人）を想定する拡張事業を開始するに至る。14年を費やしたこの事業期間中、名古屋西部の開発は大量の水需要を生み出すが、既存の東山配水塔の圧力では、距離のある西部へ送水するに十分ではない。そこで需要が少なく圧力の高まる夜間に水を溜め、昼間に西部地域へ配水できる配水塔が計画された（1934年）。ところが同時に都市計画上の工業地域が拡大され、翌年には水槽の計画容量が約7倍（4000 m<sup>3</sup>）に変更される。巨大化した水槽を支える構造が必要となり、ギリシャ神殿を思わせる列柱を配する独特のフォルムは、この結果生み出されたものだった。

この稲葉地配水塔は1937年に竣工するが、南部工場地帯の軍事的重要性が増すと、新設する大治浄水場からのポンプ圧送に代わり、稲葉地配水塔は僅か7年で使用停止してしまう。しかし、その後2度用途を変えて甦る。1967～1991年には中村図書館として、1995年からは名古屋市演劇練習館として、市民に使われ続けており、リノベーションの先進事例でもある。



名古屋市水道の第四期拡張工事の実施路線「東山配水塔」から重力で送り出された水が、名古屋市街地を横切り稲葉地の配水塔上の水槽まで届くため稲葉地配水塔には揚水施設がない。（『名古屋市水道局五十年史』1925）



▲ 施設上階には、かつて使用されていた配管が、そのまま遺されている。「昭和十一年」の刻印が見える。

◀ 旧稲葉地配水塔が持つ列柱のイメージにあわせて稲葉地公園がデザインされている。



現在はその独特の内部空間を利用して、名古屋市演劇練習館として使用されている。（写真提供：Theatre Company shelf 矢野靖人氏）

